

# クイーンズランド日本語補習授業校ブリスベン校

訪問日：3月12日（土）

## 1. 日本語補習授業校の概要

クイーンズランドには、ブリスベン校とゴールド・コースト校の二つの日本語補習校があり、今回はブリスベン校を見学させていただくことになった。ここは現地の Indooroopilly State High School の校舎を借りて授業が行われている。

この学校には、校舎の真ん中に広い芝生の中庭があり、そこに立つと、大きな窓のある教室から子ども達の楽しそうな声が響いてきた。そしてしばらくすると、職員の方が、大きな鐘を振りながら中庭に沿って校舎をまわり、授業開始を知らせてくれた。ここでは、幼稚部から中学部までの児童生徒が、土曜日の半日、国語と算数（数学）の授業を受けている。



## 2. 授業の様子



大きな返事が聞こえたので、窓のところまで近づいてみると、朝の出席をとっている最中だった。担任の先生は、一人ひとり出席を丁寧にとり、子ども達の健康状態をしっかりと把握しているようだ。子ども達はというと、それぞれ自分の持ってきた水筒を机の上に出し、近くの子と熱心に一週間分のおしゃべりを楽しんでいた。

た。まだ、子ども達の気持ちは勉強始まりとはいかないようだ。

幼稚部から低学年までのクラスは、教室が並んでいた。2年生の教室では、「スーホの白い馬」の授業が行われ、教師が教科書を範読し、その後、内容に関する発問をしていた。

2年生のクラスは2つあったが、同じスーホの授業でも、授業の進め方は個々の教師に任せられているようで、その時間の活動内容や進度も多少異なっていた。どちらのクラスも児童の実態に合わせて柔軟に授業が実践されていた。





高学年から上のクラスでは、算数（数学）の授業が行われていた。廊下から様子を眺めていると、校長先生が「どうぞ中にお入りください」と声をかけて下さり、子ども達の学習の様子を間近で見ることができた。5年生のクラスでは、学期末ということもあり、巻末の復習の問題を解いていた。教師は、指示を出すとき日本語を多く使い、子ども達も教師に対する質問は、日本語で行っていた。しかし、隣の児童と問題の内容を相談する際には、英語を使って話し合いをするなど、場に応じて言語を使い分けているのがわかった。また、教室は、教師と児童の対面型の並び方と、コの字型の並び方を組み合わせたレイアウトになっていて、一人ひとりの児童が広い机で伸び伸びと学習しているという印象だ。

### 3. 保護者会

筆者が訪問した日は、偶然にも保護者会が行われる予定になっていた。そして今回の保護者会には、外務省子女教育相談室の方が日本から来ることになっていたため、子どもの帰国後の教育に対して関心のある方々が教室いっぱいに集まっていた。

講演のタイトルは「国内教育の現状と帰国生」。ここで学習する児童生徒は、オーストラリアに長期滞在予定の者や保護者の仕事の都合で短期間で日本へ帰国しなければならない者まで様々だ。多くの保護者の方々が日本に戻った際の学校教育に不安を抱いていた。特にお子さんの帰国が、日本の受験の時期にかかりそうなご家族は深刻だ。最近はインターネットが盛んになり様々な情報を手に入れやすくなったとは言え、こうして専門家の方が日本からわざわざ来る機会はめったにならないため、保護者の方は熱心にメモを取ったり何度も質問したりしていた。

今回の講演で筆者が最も印象に残ったことは、やはり、様々な環境の中で子ども達がよりよく生きていくためには、家庭が大切なのだということ。帰国後の学校選び、日本の学校に慣れるまでの支援、子どもの言語能力を育てるための支援など、どれをとっても家族の協力が不可欠である。ここに参加した方も家庭の大切さをあらためて感じていたようだ。

### 4. 報告者の感想

学校に校門がなく、教室の大きな窓はどこのクラスも全開。ゆったりとした雰囲気の中で子ども達が伸び伸びと学習している。最近治安が悪化してしまった日本の都会では考えられないほどうらやましい光景であった。今後、言語の問題やアデソティイーの問題など乗り越えていかなければならないことが多いかもしれないが、こうして多感な時期に伸び伸びと学校生活を送ることにより、人として最も大切な心を確実に育てていると感じた。

報告者：籐本容子